

各発表の詳細（発表タイトル・キーワード・要旨）

（発表者がポスターの前で説明する時間帯） 奇数番号…13:40～15:00、偶数番号…15:10～16:30

記載項目

2025年10月24日作成（ポスター番号順）

ポ ス タ ー 番 号	部局名	発表者名	発表タイトル
	キーワード		
	要旨		
1	理学研究科	西 真之（ニシ マサユキ）	高圧実験に基づく地球内部の水の循環
	高圧実験、地球内部の水、鉱物、地震波、マントル 地球内部のマントルには、岩石・鉱物に取り込まれた形で水が存在します。私たちは、マントルの高温高圧条件を実験室で再現し、水がどの鉱物に保持され、どの条件で放出されるかを研究しています。地震学的特徴との比較から、地球内部の構造と水の循環モデルを紹介いたします。		
2	基礎工学研究科	下澤 雅明（シモザワ マサアキ）	目に見えない「磁気の渦」とらえる：磁気的な性質をもつ特殊金属UNi4BをSQUID顕微鏡で観察
	SQUID顕微鏡、磁化分布、トイダル秩序、UNi4B、電流誘起磁化、ドメイン構造 UNi4Bは、磁気的な性質をもつ特殊な金属で、その中には「磁気の渦」のような構造（磁気トイダル秩序）が現れると考えられています。本研究では、非常に弱い磁気も捉えることができるSQUID顕微鏡という装置を使って、この構造に由来する特殊な磁気現象を調べました。温度や電流を変えながら物質内部の磁気の分布を可視化し、これまで見えなかった秩序の手がかりを得ることができました。		
3	理学研究科	中野 元裕（ナカノ モトヒロ）	生体材料の凍りかた -凍る水・凍らない水-
	ハイドロゲル、氷晶析出、相分離、ガラス転移、スピノーダル分解 生体材料、たとえば豆腐のような食品やコンタクトレンズ、人工臓器の素材などに、ハイドロゲルが使われています。ハイドロゲルは分子鎖のネットワークとそれに含まれる水分子からなる構造で、水分子どうしが寄り集まっていたり、ネットワークにくっついていたり、いろいろと異なる環境にある水分子を含んでいます。それらを見分ける方法の一つが冷やして凍らせてみることです。精密な熱力学測定でその様子をあばきます。		
4	医学系研究科（豊中）	郭 博（GUO Bo、カク ハク）	変性膝半月板は、パラクリン機構を介して関節軟骨細胞における変形性膝関節症関連因子の遺伝子発現を変化させる
	変形性膝関節症、変性半月板、関節軟骨細胞、共培養、培養上清、パラクリン作用 変形性膝関節症（OA）の病態における変性膝半月板の関与を検討しました。ヒト変性半月板と共培養した関節軟骨細胞では、炎症関連因子やマトリックスメタロプロテアーゼなどのOA関連因子の発現が促進されました。また、半月板組織の培養上清は、関節軟骨細胞でのこれらのタンパク質の発現を誘導しました。変性半月板組織がパラクリン機構を介して関節軟骨細胞の遺伝子発現を変化させ、OA発症に関与する可能性が示されました。		
5	基礎工学研究科	近藤 慎司（コドウ シンジ）	次世代二次電池の安定作動を実現する理想的な負極被膜とはどのようなものか
	リチウムイオン二次電池、電極被膜、イオン液体、界面分析 リチウムイオン二次電池の安定作動には、初期充電時に電解質の分解によって負極表面に形成される被膜が重要な役割を果たします。しかし、多成分の分解生成物が無秩序に混在する複雑系であるため、本質的な理解は大きく遅れており、材料設計は未だ経験則に依存することが多いです。本研究では、系統的に分子設計したイオン液体を用いて、分解挙動および生成物の選択性制御に挑む事で、理想的な被膜の構造・機能の解明を目指します。		
6	国際公共政策研究科	宮野 紗由美（ミヤノ サユミ）	How Japanese Business Managers See the U.S.-China Rivalry: Balancing Economic and Geopolitical Stakes 日本企業の管理職層から見た米中競争：経済的利害と地政学のはざま
	firms, business, geopolitics, survey experiment As U.S.-China tensions rise, businesses in middle-power countries like Japan face difficult trade and investment decisions. This study examines how Japanese firm managers weigh geopolitical risks, through a December 2024 survey experiment conducted during Donald Trump's second presidential term. Results show firms are highly sensitive to the risk of U.S. retaliation when engaging with China, while China's security threat itself is less influential. Although most oppose trade restrictions, many accept U.S.-led measures targeting China, even at their own expense, while rejecting Chinese-led restrictions. These findings highlight how private-sector actors internalize geopolitical alignments, offering insight into business decision-making amid great-power competition.		
7	人文学研究科	森島 淳貴（モリシマ アツキ）	哲学における平和論：カントからハーバーマスにかけて
	哲学・倫理学、平和論、人権論、カント、ハーバーマス 「常備軍は時とともに全廃されなくてはならない」。哲学者イマヌエル・カントがその著『永遠平和のために』にてこう断言してからはや230年。国際社会は未だに戦争状態から脱し切れてはいません。こうした逆境の中でも、諦めの悪い多くの哲学者たちは依然として「永遠平和」という理念に固執してきました。本発表では、カントを批判的に読み繋ぎながら現代の平和論を練り上げようとする哲学者クルゲン・ハーバーマス（1929-）の試みを足がかりに哲学における平和論について検討します。		
8	理学研究科	質量分析センター 豊田 岐聡（トヨタ ミチサト）	新設 豊中地区 質量分析センターの紹介
	質量分析、機器共用、コアファシリティ、研究教育支援、装置開発、産学共創、研究人材育成 質量分析は、高感度かつ高精度に物質を同定・定量できる研究に欠かせない基盤技術です。本年度、豊中地区の多様な質量分析装置および支援人材を集約し、ワンストップで最適な分析ソリューションを提供する質量分析センターを設立しました。基礎科学だけでなく、食品、文化財、先端材料などの分析から装置開発まで幅広く学内外の研究者のニーズに応えます。装置ラインナップと活用事例、分析相談を含めたセンター利用方法などについてご紹介します。		

9	法学研究科	大久保 規子 (オオクボ ノリコ)	琵琶湖も訴訟を起こせるかー自然の権利最前線
	生物多様性、権利、法、中南米 日本では、権利をもつのは人間だけだと考えられています。しかし、今、エクアドル、コロンビア等、中南米を中心に、川や山にも権利を認める法律や判決が次々に現れています。人間が引き起こした気候危機や生物多様性の危機に直面し、人類も生態系の一部であるという認識が広まって、既存の法体系に根本的変革をもたらそうとしています。グローバルな議論に耳を傾け、日本の常識を問い直してみませんか。		
10	COデザインセンター	荒木 智子 (アラキ トモコ) 学際大学院機構	周産期のリハビリテーション ーSexual Reproductive Health and Rightsから考える女性の健康ー
	妊娠、出産、孤立、リハビリテーション、Sexual Reproductive Health and Rights 日本の周産期の医療水準は高く、妊産婦死亡率は非常に低いです。一方で産後1年未満の死因第1位は自殺であり、産後ケアなどの施策への認知は上がってきましたが、社会課題はまだ多く存在します。SRHRは「性と生殖の健康と権利」と訳され、妊娠出産等について自身で意思決定できることを示します。日本におけるSRHRの課題とともに産前産後の課題解決について演者の研究や活動を提示し、多分野の方々で議論したいと考えています。		
11	人文学研究科	鈴木 啓峻 (スズキ ケイシュン)	トーマス・マン文学と現代
	ドイツ文学、トーマス・マン、イロニー、戦争と文学 トーマス・マン (1875-1955年) は、『ブッデンブローック家の人々』、『魔の山』などの作品で知られるドイツの小説家で、矛盾する立場を「あれもこれも」的に留保する「イロニー」を思考の軸として自らの文学世界を構築しました。本発表では、マンがどのような状況下でこういった思考の型を展開したのかということ、さまざまな歴史的、文化的な観点から紹介したうえで、それが現代社会を生きる私たちとどのように関わるかを考えます。		
12	人文学研究科	本郷 美琴 (ホンゴウ ミコト)	現実を超越する芸術： デイドロ『1767年のサロン』における観察者としての芸術家について
	フランス文学、美学、デイドロ、18世紀、西洋美術、観察 本発表では、近代美術批評の祖とされるデイドロが『1767年のサロン』評において示す芸術家像を「観察者」という視点から分析します。デイドロは目の前の自然の徹底的な観察こそが、単なる写実を超えた効果を持つ芸術作品の基盤になると、芸術の美を逆説的に論じています。18世紀の自然科学認識や美学思想の文脈を踏まえつつ、具体的な美術の鑑賞体験を通してデイドロが、芸術制作の要点とみなした「観察」の対象と効果をどのように論じているかを明らかにします。		
13	国際機構国際教育交流センター	チェンドム アンドレア	江戸の笑いを現代に：黄表紙を活用した異文化理解教育
	黄表紙、文化翻訳、異文化理解教育、異文化間歴史能力、体験型学習、動画制作授業 江戸時代の黄表紙は、日本の庶民文化に根ざしたユーモア表現で、当時の人々の感性を知る貴重な資料です。本発表では、日本人学生と留学生がチームを組み、授業内で黄表紙の内容を学んだ上で、それと現代の社会や文化に共通するテーマを見出し、1分以内の英語の動画として表現した教育実践を紹介します。分析には文化の氷山モデルを手がかりとし、時代を越えて響き合う文化の層を映像化する試みを通じて、日本と世界をつなぐ異文化理解の可能性を考察します。		
14	量子情報・量子生命研究センター	小川 和久 (オガワ カズヒサ)	阪大QIQBにおける超伝導量子コンピュータ開発2025
	量子コンピュータ、超伝導、量子情報、量子計算 量子コンピュータは素因数分解や量子化学計算などの問題に対して、古典コンピュータよりもはるかに高速に計算できることが期待されており、世界的な開発競争が進められています。大阪大学 量子情報・量子生命研究センター (QIQB) では、2021年度より超伝導量子コンピュータの開発を進めています。特に2025年7月には初の純国産機の開発を発表し、同年8月には大阪関西万博の会場からのクラウド操作体験を計画しています。本発表ではこちらの実機の紹介・解説や、我々の開発の取り組みについて説明します。		
15	D3センター	川崎 猛史 (カワサキ タケシ)	乱れの中の秩序を探る：深層学習で読み解く物質科学の構造指標
	ソフトマター物理学、人工知能 (AI)、分子動力学シミュレーション、ガラス転移、細胞動体 深層学習をはじめとするデータサイエンスは構造予測や分類などで大きな成果を挙げていますが、そのブラックボックス性ゆえに、自然科学に不可欠な因果的理解や本質構造の把握には限界があります。本講演では、深層学習の解釈性を高めることでこの課題に挑み、アモルファス固体に潜む物性や動態を支配する特徴構造を抽出する研究成果を紹介します。さらに本手法が物理学のみならず、生体・疾患組織における構造ー機能解析へも応用可能であることを議論します。		
16	基礎工学研究科	多田 幸平 (タダ コウヘイ)	潜在分子機能の固体複合を用いた顕在化に関する理論研究
	機能性分子、分子-固体界面相互作用、電子状態計算、計算機シミュレーション 革新的な省資源化や超軽量材料の実現を目指して様々な材料機能を持った分子が研究されていますが、残念ながら、我々は分子の持つポテンシャルを100%有効活用できていません。本研究では分子が持つ潜在機能を、分子-固体相互作用を用いて顕在化させることができないか、電子状態の計算機シミュレーションで検討しました。計算結果より、孤立状態では不安定な機能性電子状態が固体によって安定化される機構を明らかにしました。		
17	理学研究科	松本 卓也 (マツモト タクヤ)	分子物質ネットワークから知性の本質を考える
	物質による計算、マテリアル知能、分子ネットワーク、ホッピング伝導、高分子物質 知性とは何でしょうか？ 知性は生物にだけあるのでしょうか？ 無生物である分子物質ネットワークを用いた音声認識や文字認識を通して未来の人工知能 (AI) と化学の役割について考えます。		
18	キャンパスライフ健康支援・相談センター	山本 陵平 (ヤマモト リョウヘイ)	大阪大学で最も学生の喫煙率が高い学部は？
	学生、喫煙、学部、健診 2007-2015年に大阪大学保健センターにおける新入生健診で「喫煙歴無し」と回答した男性17493人、女性8880人を6年生時学生健診まで追跡した結果、男性2027人 (11.6%)、197人 (2.2%)が学生健診で「喫煙歴有り (禁煙含む)」と回答しました。多変量Cox比例ハザードモデルによる生存解析の結果、喫煙リスクが最も高い学部は●●学部であり、喫煙に関する健康教育が重要な学部である考えられました。		

19	ミュージアム・リンクス	辻野 博文 (ツジノ ヒロフミ) 伊藤 謙 (イトウ ケン) 波瀬山 祥子 (ハセヤマ ショウコ) 西川 哲矢 (ニシカワ テツヤ) 菅 真城 (カン マサキ) 船越 幹央 (フナコシ ミキオ) 河原 源太 (カワハラ ゲンタ)	部局・地域連携ハブとしてのミュージアム・リンクス
	薬学部展、天然記念物マチカネワニ化石、大阪大学百年史、松本拳山展、三人の藤野先生展 ミュージアム・リンクスは、総合学術博物館、適塾記念センター、アーカイブズが、それぞれの強みを生かしながら、社会と大学との連携をより柔軟、かつ総合的に展開する組織として、2023年度に発足しました。部局や地域との連携を活用した展覧会や、保管資料の価値を高める活動、これから全学的な活動が必要となる百年史の編纂に向けての準備活動などを紹介します。		
20	学外： 公益財団法人サントリー文化財団	大栗 佳奈 (オオグリ カナ)	サントリー文化財団と劇作家・山崎正和
	文化、社交、お酒、財団、民間 サントリー文化財団は1979年の設立以来、6つの事業を通して、既存の枠組みを超えた文化の土台づくりに取り組んでいます。その制度設計を行ったのが、劇作家で大阪大学名誉教授の故山崎正和氏です。「だんだんと人々がバラバラになって個人化し、直接に人と人が会って話し合う機会が減る。そういう文明のなかで、社交文化を作ってきたことは大変おもしろい」と氏が語った弊財団の活動を紹介します。		
21	基礎工学研究科	小野 亮生 (オノ タカオ)	ナノ炭素材料グラフェンを用いた超高感度なバイオ計測
	細菌、ウイルス、医療診断、創薬、グラフェン、超高感度計測 パンデミックを経て、発症前段階での迅速な感染症診断や、治療薬開発の重要性がさらに高まっています。私は、原子1個分の厚みしかないユニークなナノ炭素材料グラフェンを用いて、バイオ物質を超高感度に検出・計測するグラフェンバイオセンサーの研究を行っています。ポスターでは、主に研究の応用的な観点から、胃がんの原因であるピロリ菌を1個レベルで検出する技術や、抗ウイルス薬の薬効を評価するプラットフォームについてご紹介します。		
22	理学研究科	有賀 隆行 (アリガ タカユキ)	細胞内の宅急便：ナノサイズの分子モーターはゆらぎを利用する！？
	生体分子モーター、1分子力学操作、光ピンセット、非平衡物理学、細胞内の非熱的なゆらぎ 私たちの研究室は、1つ1つの分子を“直接見て、操作できる”特別な顕微鏡を使って、命のしくみを探っています。なかでも、細胞の中で歩きながら荷物を運びキネシンという生体分子モーターは、まわりの自然な揺れ（熱ゆらぎ）を上手に利用して動くと考えられてきましたが、実は細胞はエネルギーを使って自らの内部をかき混ぜており、その作られたゆらぎも分子たちが活用していることが見えてきました。本会では、その最新の手がかりを紹介します。		
23	理学研究科	岡本 直大 (オカモト ナオヒロ)	可視光照射で物性が可変するゲルの創製
	超分子錯体、刺激応答性分子、分子構造スイッチング、超分子ゲル、材料物性制御 輪の形をした環状分子の穴の中に糸のような分子が通っている構造体は、環状分子が物理的に糸状分子と絡み合いながらも自由に動くことができます。このような構造体の端に光に応答して形状を変える分子を導入することで、環状分子が糸からすり抜ける自由度を調整できます。このユニットを高分子に導入することで三次元にネットワーク化されたゲルができました。このゲルの物性は化学物質添加や光照射により変わることがわかりました。		
24	基礎工学研究科	渡邊 大記 (ワタナベ ダイキ)	かき混ぜ棒なし攪拌機を用いた細胞培養
	攪拌機、数値シミュレーション、細胞培養、回転容器 かき混ぜ棒（攪拌翼）の無い、新しい攪拌方法を提案します。一般に、細胞のような繊細な試料を含む液体をかき混ぜる場合、試料に強い力をかけてしまう特性を持つかき混ぜ棒は不向きです。我々の考案した手法では、容器の単純な回転運動のみを用いて、容器内の液体試料の均一混合を実現します。さらに、容器内の流れを正確に再現可能な最先端の数値シミュレーション技術を用いて、攪拌に最適な容器の運転条件をデジタル上で検討することも可能にしました。		
25	COデザインセンター	鹿野 祐介 (シカノ ユウスケ)	企業のなかに責任ある研究開発文化を醸成する — ELSI研修プログラムの開発と設計 —
	ELSI（倫理的・法的・社会的課題）、RRI（責任ある研究・イノベーション）、テクノロジーアセスメント、研究開発ガバナンス 本発表では、株式会社メルカリとの共同研究のもと、企業における責任ある研究開発文化の醸成と研究開発ガバナンスの強化を目的として実施した実践的アプローチの設計とその実践内容について報告します。具体的には、メルカリの研究開発組織R4Dと協働し、研究開発プロセスに責任ある研究・イノベーション（RRI）の理念とテクノロジーアセスメントの視点を組み込むことを目指して、企画・実施した「ELSI研修プログラム」を紹介し、先端科学技術がもたらす倫理的・法的・社会的課題（ELSI）の抽出と、その対応に向けた意識形成を促す方法論について検討します。		
26	全学教育推進機構	坂口 愛沙 (サカグチ アイサ) 金森 サヤ子 (カナモリ サヤコ) 中村 征樹 (ナカムラ マサキ) 進藤 修一 (シンドウ シュウイチ)	学部教育プログラム「OU-SDGsプログラム」の開発
	サステナビリティ教育、SDGs、人材育成、全学共通教育、教養教育 大阪大学OU-SDGsプログラムは、複雑化する社会課題の解決に貢献し、「いのちを大切に、一人ひとりが輝く未来社会」の実現に資する人材を育成する学部教育プログラムです。学部初年次段階から履修できる全学共通教育科目からSDGs関連科目群を設定し、既定の単位を修得した学生に対して修了認定証を授与します。ここでは、プログラムの設計、実施状況、これまでの活動内容等についてご報告します。		

27	国際機構国際教育交流センター	程 文娟 (テイ ブンケン) 細田 千加 (ホソダ チカ)	多文化共修科目における英語自己評価と参加態度の関連 — 初年次学生意識調査
	多文化共修科目、参加態度、英語能力 ソーシャルインパクト創出支援事業の一環として、本学では学部初年次学生を対象とする全学必修科目「多文化共修」の導入を予定しています。現在、科目の企画・開発を進めており、設計の基礎資料となる当該学生の意識調査を実施しました。本発表では、その結果の一部、特に学生の英語能力の自己評価と多文化共修科目への参加態度（意欲）との関連性について報告します。		
28	マルチリンガル教育センター	新原 由希恵 (シンハラ ユキエ)	A research proposal for comparative review of communication modes in tasks タスクにおけるコミュニケーションモードの比較研究
	task-based language teaching (TBLT), communicative task, facet-to-face (FTF) communication mode, computer-mediated communication (CMC) mode Previous second language (L2) studies have compared different communication modes used in L2 tasks—such as face-to-face (FTF) and computer-mediated communication (CMC)—and have reported various findings depending on the mode. To our knowledge, both modes offer distinct potential benefits for L2 learning. This indicates that attempting to determine which mode is inherently superior may be unproductive; instead, instructors should consider how to leverage these modes in alignment with their pedagogical goals and specific learning contexts. This presentation will be about an ongoing research project that systematically reviews and compares studies on communication modes in L2 tasks. And will present the theoretical background of the project, and one of the key teaching method, TBLT in depth.		
29	国際公共政策研究科	川窪 悦章 (カワクボ タカフミ)	Geopolitical Risks and Global Supply Chains: Evidence from Shipping Data
	Global Supply Chains, geopolitical risks, shipping, AIS data More than 90% of Japan's trade activities relies on maritime supply chains facilitated by vessels. In recent years, maritime logistics has been increasingly vulnerable to geopolitical risks, large-scale natural disasters, and the enforcement of new environmental regulations. This study plans to analyze how these developments affect shipments and global supply chains by using the AIS data. Eventually, the project aims to provide evidence to support the realization of stable and resilient maritime transportation.		
30	高等司法研究科	趙 飛倩 (チョウ ヒセン)	中国財産犯における財産概念について
	刑法、財産犯、財物、財産上の利益 中国における財産犯議論は、日本とは異なる展開を見せています。中国刑法の総則では「財産」の概念が規定されていますが、各則の財産犯罪では「財物」という用語のみが使用されています。このような規定上の不一致により、理論上は「財物」に財産上の利益を含めて広く解釈する傾向が生じており、「財物」概念の内実について多角的な議論が展開されています。日本の各財産概念説を参照する動きも見られます。本研究は、「財物」を広く捉える中国の解釈論の構造を明らかにし、財産概念の内実及び損害の判断基準に及ぼす影響を分析することで、財産犯罪理解に対して新たな視座を提供することを目的としています。		
31	基礎工学研究科	藤井 郁哉 (フジイ ケイ)	可視光酸化還元触媒によるスチレン類のレドックス活性エステルを用いた1,2-ジアミノ化反応
	有機合成、触媒化学、光反応、光触媒、ジアミン合成、ラジカル反応 1,2-ジアミンは、医薬品や天然物、有機触媒に広く含まれる重要な構造単位です。本研究では、有機光触媒と可視光を利用して、豊富で安価なアルケンを出発原料とし、温和な条件下で高効率かつ選択的に1,2-ジアミンを導入する合成手法を開発しました。		
32	理学研究科	川畑 貴裕 (カワバタ タカヒロ)	宇宙における元素合成過程の研究 –トリプルアルファ反応率の測定–
	元素合成、原子核反応、加速器、放射線検出器 わたしたちの宇宙が誕生したとき、まだ宇宙には一切の元素が存在していませんでした。しかし、現在の宇宙には様々な元素が存在しています。全ての元素は138億年にわたる宇宙の進化の過程で原子核反応によって生み出されてきました。つまり、宇宙の歴史は元素合成の歴史でもあり、宇宙の成り立ちを明らかにするためには、原子核反応を詳しく調べる必要があります。今回の発表では、宇宙における元素合成において最も重要な反応のひとつとして知られるトリプルアルファ反応について、その反応率を測定する取り組みについて紹介します。		
33	人文学研究科	宇野田 尚哉 (ウノダ ショウヤ) GARASINO, Facundo (ガラシーノ, ファクンド)	グローバル日本学の展開と人材育成
	グローバル日本学、「国際日本研究」コンソーシアム、国際的研究発信力強化、横断型教育プログラム 近年、国内26機関・海外62機関の参加する「国際日本研究」コンソーシアムが活発に活動するなど、日本研究の国際連携が、飛躍的に強まっています。本学のグローバル日本学教育研究拠点 (GJS-ERI) は、この動向の中核を担っており、教育面においては、グローバル・アカデミアにおいて活躍する日本研究人材の育成に努めています。本発表では、GJS-ERIの提供している教育プログラムとそれと連動した学術イベントの実績・成果を紹介します。		
34	経済学研究科	許 衛東 (Shii Ueiton, キョ エイトウ)	「新型都市化」政策下における中国の地域間所得格差 —可処分所得のデータベースの構築からみた格差と人口移動—
	可処分所得、地域間格差、地域内格差、産業立地、人口移動、大卒者初就職都市選択 近年の中国では、少子高齢化や不動産不況などの景気後退を背景に従来の「投資主導型」から「消費主導型」への経済構造の転換が進んでおり、「新型都市化」政策や「共同富裕」論も登場しています。学術研究の現実問題として所得格差を測るデータは乏しいので、県民所得の概念に近い「可支配收入」のデータベースを作りながら、産業や労働力や大卒人材などの空間変動の特性を解析してみました。進捗状況を紹介させていただきます。		

35	理学研究科	野場 啓 (ノバ ケイ)	負スペクトラルLévyの到達時刻について
	確率論、一次元Lévy過程、到達時刻、スケール関数 一次元Lévy過程は非常に性質の良い確率過程の一つであり、その応用先は保険会社の剰余金の表現やダム貯水量の表現など多岐にわたります。一次元Lévy過程の挙動の特徴を捉える上で、その到達時刻の分布は重要な要素です。今回は特に、負スペクトラルLévy過程の到達時刻に関する研究を紹介します。		
36	経済学研究科	竹内 恵行 (タケウチ ヨシユキ)	新制大学発足期における統計学教育の制度化について
	数理統計学、一般教育（一般教養）、数学教育、学制改革、大学教育史、統計学史 1920年代以降の現代統計学の進展に伴い、統計学は数学の一分野としても認識され始めましたが、日本における制度化は、第二次世界大戦後の学制改革を待たねばなりません。連合軍総司令部民間情報教育局教育課のLulu Homes氏の指導により、新制大学の一般教育において、統計学は社会科学系に加え自然科学系の科目としても位置付けられました。本報告は、大学基準協会の議事録や大学の学生便覧等の一次資料に基づき、新制大学発足期の統計学教育の制度化のプロセスを明らかにする試みです。		
37	全学教育推進機構	七五三木 聡 (シメギ サトシ)	視覚神経科学に基づくスポーツパフォーマンス最適化技術の創出
	視覚情報処理、球技スポーツ、眼球運動、運動視能力 卓球や野球では、高速で飛来するボールに対し、いかに素早く、かつ正確にラケットやバットを合わせられるかが勝負を分けます。このパフォーマンスを決定するのは、単に身体を動かす筋肉の能力だけではありません。むしろ、飛んでくるボールの視覚情報をいかに迅速かつ正確に捉え、脳で処理できるかが、その後の動作の反応速度と精度を左右します。そこで、視覚情報処理に関わる脳機能を高め、スポーツパフォーマンスを最適化する技術を紹介いたします。		
38	人文学研究科	杉本 侑嗣 (スギモト ヨウジ)	統語的計算モデルによる脳活動データのモデリング
	生体信号解析、自然言語処理・計算言語学、計算神経言語学、計算モデル 本研究では、脳活動データの生理的指標を用いて計算モデルの評価をすることを目的としています。従来の神経言語学では、非常に制約された言語刺激を使うことで、言語処理に関する脳部位を特定することが行われてきました。他方で近年では、自然な刺激文を使用した実験を行い、自然言語処理で提案されている計算モデルなどから算出される指標を用いて、脳活動データの予測の検証が行われてきており、本研究では、統語的計算モデルがどのくらい脳活動を予測するのかを検証した結果を紹介します。		
39	医学系研究科 (豊中)	清水 大 (シミズ ダイ)	サルの脳波から「動こうとする」特徴を読み取る：データ量とAI精度の関係
	脳波、ECoG、運動意図、機械学習、スケーリング則、ディープラーニング 侵襲脳波 (ECoG) から、サルが「動こうとする」瞬間をAIで判別する研究です。約1年間・61日分のデータで検証したところ、データ量が増えるほど精度は向上しますが、ある量を超えると伸びが小さくなるのが分かりました。特に単純な1次元の畳み込みニューラルネットワークによる推定が安定して高い精度を示し、効率的なデータ集めと手法選びに役立つ知見を得ました。		
40	D3センター	李 晨 (リ シン)	AIで薬のタネをつくる：分子を生み出す生成AIの活用
	人工知能 (AI)、生成AI、AI創薬、薬づくり、分子デザイン 従来の創薬は、膨大な候補分子から専門家が評価や試行錯誤を繰り返し、有望な分子を選び出す手作業に大きく依存してきました。そのため、コストや開発期間が長期化する課題があります。本研究では、近年急速に進展している生成AI技術を活用し、新薬候補となる分子構造を自動的に設計・創出する手法を提案します。この技術により、複雑で時間のかかる分子設計を効率化し、専門家の負担軽減と創薬スピードの大幅な向上を目指します。		
41	附属図書館	VOULGARIS NIKOLAOS (ヴルガリス ニコラオス)	国際連携による研究データ管理教育の推進：大阪大学とベルリン自由大学の協働
	研究データ管理 (RDM)、教育教材、国際連携、オープンサイエンス、デジタルヒューマニティーズ 大阪大学は、研究データ管理 (RDM) の基礎編・実践編教材を開発し、IIIFやTEIを用いた人文学向け教材も整備しています。一方、ベルリン自由大学はTrain-the-Trainer形式のワークショップを行い、心理学分野を中心に幅広い教育を展開してきました。本発表では、両大学の教材交流とデジタル・ヒューマニティーズ分野での協働事例をご紹介します。研究者・学生・図書館員のニーズに応える国際的なRDM教育の展望について議論いたします。		
その他	豊中市 都市活力部 産業振興課 (展示)	豊中市の企業立地施策について	
	産業振興、企業立地、住工混在問題、産業誘導区域、重点エリア 豊中市では、平成30年 (2018年) 1月に、事業所の安定した操業環境の維持・形成を目的とした「豊中市企業立地促進計画」を策定しました。同計画に基づき、産業誘導区域・重点エリアを設定し、奨励金制度の拡充や補助金の創設を行いました。また、既存データを活用し、分析データに基づいた企業立地施策制度の効果検証・支援制度の見直し・拡充を行うべく、計量経済学に基づいた効果検証を行いました。		
その他	豊中地区研究交流会 幹事部局 (展示)	豊中地区研究交流会の10年：分野を超えた知の交流の軌跡	
	豊中地区研究交流会、研究者間交流、文理融合、異分野連携、10年の歩み 豊中地区研究交流会は、2016年12月に豊中キャンパス内の研究者が文系理系の垣根を超えて交流し、互いの研究を知る場として誕生しました。今年、第10回を迎える節目の年となるにあたり、本研究交流会が誕生した経緯と、この10年の歩みを振り返ります。		